

現地支援委員会

ニュースレター

「第15号」

2015年3月26日



from 東北

全国の諸教会の皆様、日頃から祈りと献金によるお支えをありがとうございます。震災から4年が経ち、新しい生活を始める希望の中にある人、新しい生活のために課題を抱えている人、3.11の記念日反応で傷ついている人など、現地には様々な状況があります。長かったこの4年ですが、これからまだ何年も仮設住宅での暮らしを余儀なくされる方もおられ、放射能汚染も深刻です。現地教会の働きは5年目に入り、現地の状況に合わせて様々な対応が求められる一年になりそうです。ぜひ引き続きお祈りください。今号では、東北の教会や被災地での3.11、また被災地の現在の様子をお届けします。

東北の教会や被災地での3.11

教会での3.11祈り会

3月11日(水)には、それぞれの教会で午後2時46分に合わせて、あるいは夜の時間に追悼の祈り会を持ちました。現地支援委員会で作成した祈りの言葉を用いたり、被災された方の証言を聞いたり、地域の方を招いたり、参加者と震災の出来事を話し合ったりと、様々な形で祈りを合わせました。



郡山コスモス通り教会

仙台長命ヶ丘教会

南光台教会

各支援場所での3.11



宮前仮設で祈りを込めて賛美

大槌町安渡地区の黙禱の時

郡山市緑ヶ丘仮設での体操の様子



お届けした花束

牡鹿半島給分浜でのお茶会。桜餅作りの様子

野田村でのお茶会

「被災者の自立願う」仙台・集会

東日本大震災から4年となった11日夜、「3.11追悼と黙想の夕べ」と題した集会が仙台市青葉区の日本バプテスト仙台基督教会で開かれた。

牧師や学校職員らでつくる実行委員会の主催。市民ら約70人が参加した。石巻市の被災者2人が震災時の状況や復興に向けた課題について証言。津波で家を流された同市鮎川浜の鯨専門店経営、和泉いち子さん(64)は「被災者の一日も早い精神の自立と再生を願う」と述べた。

20本のろうそくに火をともし、マリンバが演奏される中、参加者は犠牲者の鎮魂などを願って黙想した。実行委員長の牧師、小川義伸さん(59)は「震災から4年たっても、災害弱者といわれる方々が将来の道筋を描けない現実を過ごしている。そういう人にもっと心を向けないと本当の復興はない」と話した。

被災者の証言などに耳を傾け、鎮魂の祈りをささげた集会

祈りと震災

仙台教会で行われた「3.11追悼と黙想の夕べ」の記事 (河北新報 2015年3月14日朝刊より)

被災地の今

「東北は元気です。ですが、じゃあもう大丈夫、というわけではないのです。」これは、福島民報、河北新報、岩手日報の合同企画「3.11特集」の言葉です。復興の状況は地域によって様々ですが、いまだ厳しい状況の中で暮らしている方々、人口が減った町、分断された町、放置されたままの汚染土、そんな光景が現在も東北にはあります。宅地造成完了予定がこれから2年後という地域もあります。



現在の野田村の様子



大槌町の現在の様子



野田村の高台移転用地、復興道路工事



牡鹿半島給分浜の宅地造成の様子



福島県飯館に今も残された汚染土



5.29 μSv/hの場所



6号線、常磐道開通



牡鹿半島にカキ加工場完成



牡鹿月浦に建設中の住宅



巨理では公営住宅が完成